

重要文化財馬場家住宅の保存と活用

——古文書整理・調査活動と見学会報告——

服 部 亜由未

1. はじめに

長野県松本市の南部、内田地区に位置する馬場家（図1）では、土地と多くの建造物が国の重要文化財に指定され、一部が松本市立博物館の分館として公開されている。また、同家には、江戸時代前期以来の貴重な古文書が多く伝来しており、屋敷と古文書、そして景観が一緒に残されている点で価値が高い。これまで筆者は、名古屋大学重要文化財馬場家住宅研究センターの教員や、愛知県立大学（主に日本文化学部歴史文化学科）の学生と共に、馬場家が所蔵す

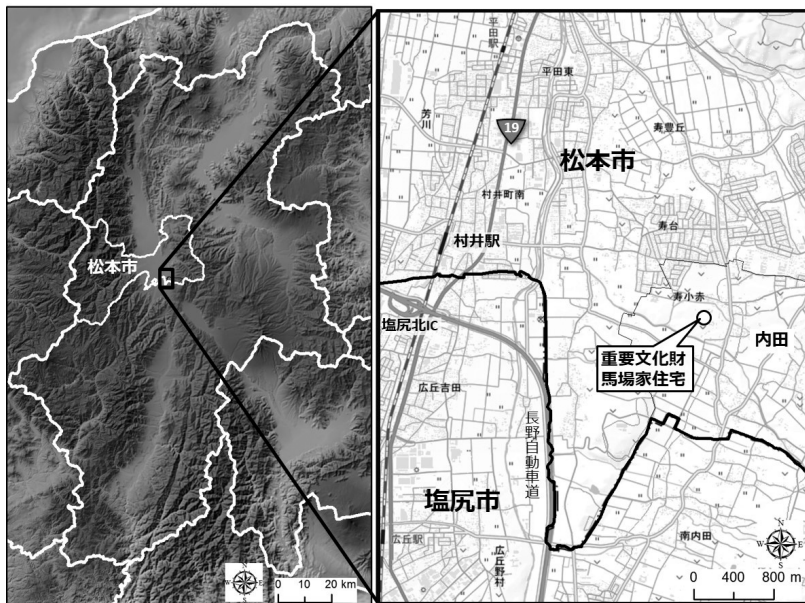


図1 馬場家周辺図（地理院地図に加筆）

る古文書の整理や調査活動を続けてきた。本稿では、学生と共に起こった古文書整理・調査活動およびその教育的効果と、重要文化財馬場家住宅の見学会について報告する。

2. 重要文化財馬場家住宅概観

屋敷地の北東（鬼門の方角：図2）に位置する墓地の碑文によれば、馬場家の初代は、馬場治部省源亮政で、1581（天正9）年8月15日に没した。伝承では、馬場治部省源亮政は、武田信玄に仕えた馬場美濃守信春（武田四天王の一人に数えられる）の縁者とされ、1582年武田氏滅亡を機に内田の地を開発、移り住んだとされている。

江戸時代の歴代当主は村役人を務め、広大な田畑を所有した豪農であった。伝承では、諏訪高島藩の藩主と親密な関係をもつ特別な地位にあったとされる。6代目（与兵衛）は百瀬甚五郎の息子であり、5代目（馬場甚兵衛）の娘と一緒に後を継いだ。6代目以降、改姓の理由は諸説あるものの、姓を公

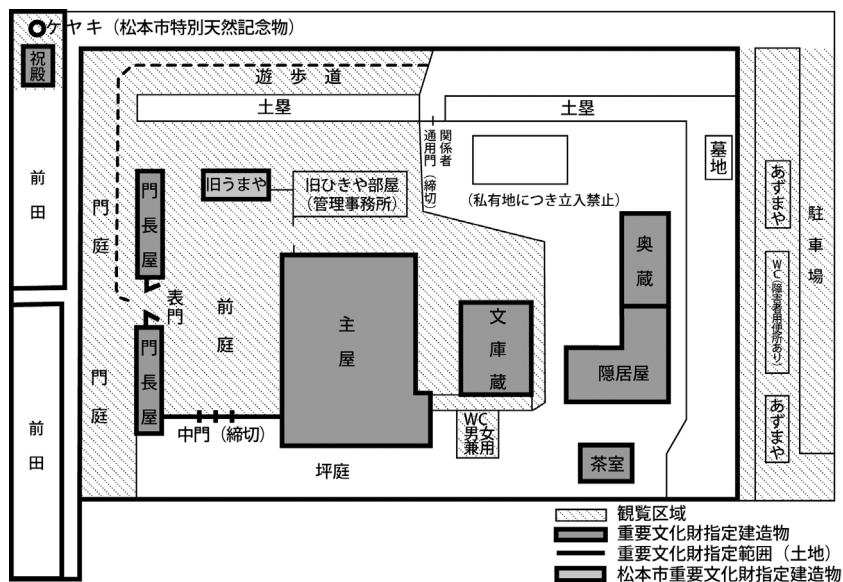


図2 重要文化財馬場家住宅案内図（重要文化財馬場家住宅リーフレットより作成）

称する時に実家の「百瀬」を用いた。江戸時代の大半（6代目～12代目）は「百瀬」の姓を名乗っていたことになる。馬場家所蔵の古文書からは、12代目（治左衛門）の1839（天保10）年頃より再び「馬場」姓のみを使用していることがわかる¹⁾。

明治維新後も、馬場家は戸長などの役職を歴任した。13代当主（馬場與平）が片丘村村長になった一時期に、馬場家の屋敷は村役場として使用されていた。15代当主（馬場称徳）は外交官として、1914（大正3）年メキシコ革命時に日本人捕虜を救助した。この15代当主は丹羽昌一著『天皇の密使』のモデルとなった。

馬場家の屋号は「古屋敷」と呼ばれ、土地（面積約13,000㎡）とともに多くの建造物が、重要文化財に指定されている（図2）。国の重要文化財に指定された建造物としては、主屋（1851年築）、中門・表門及び左右長屋（1859年築）、文庫蔵（1845年築）、隠居屋（1864年築）、奥蔵（1864年築）、茶室（1870年頃築）があり、松本市重要文化財に指定された建造物としては旧うまや（江戸末期築）がある。非常に古い建造物というわけではないが、ほぼ同時期に建築された主要建造物がそろって残り、塀や土塁も含め、屋敷構えが往時の姿を良くとどめている点で価値が高い。主屋は、「雀おどし」と呼ばれる棟飾りを付けた、長野県西南部に分布する本棟造である。

このように馬場家が重要文化財に指定されるまでには、以下のような変遷があった。1986年に「馬場屋敷の保存と活用を考える市民の会」が発足し、財団法人観光資源保存財団（日本ナショナルトラスト）への寄贈に向け、市民見学会や毎月の清掃作業等の活動がなされていた。しかし、具体的な進展がないため、1988年に同財団との交渉を白紙に戻し、松本市への寄贈を検討することとなった²⁾。1992年、16代当主（馬場太郎）が敷地西半分の土地と建造物を松本市へ寄贈した。寄贈当時の馬場家は傷みが激しく、1994年から松本市により保存修理工事がおこなわれた。この修理工事は、総事業費約4億2千万円をかけ、1895（明治28）年の家相図（図3、図4）に基づいて復原された³⁾。

1996年に重要文化財指定、1997年に松本市立博物館附属施設「重要文化財馬場家住宅」として公開を開始した。2000年には、エコミュージアムの考え

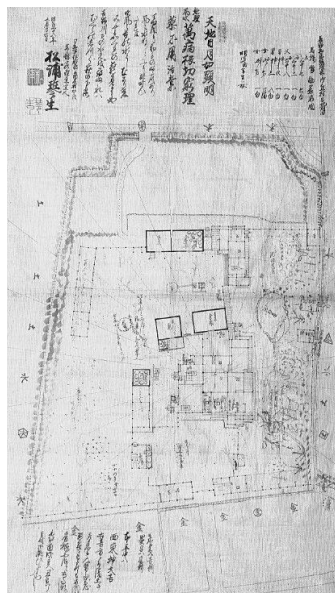


図3 明治28年馬場家家相図

『松本市重要文化財馬場家住宅第Ⅰ期修理工事報告書』より引用

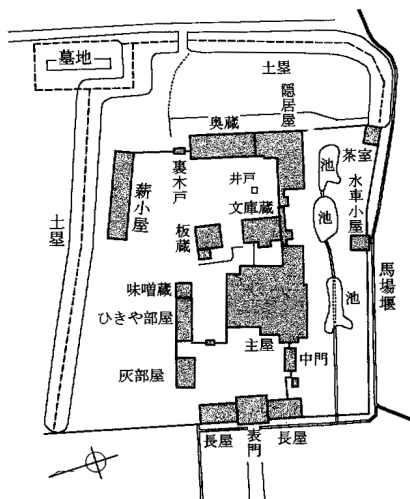


図4 明治28年馬場家家相図による配置図
『松本市重要文化財馬場家住宅第Ⅰ期修理工事報告書』挿図2-3より引用

方をもとに、重要文化財馬場家住宅はじめ市内の博物館13館⁴⁾を核として結びつけ、まち全体が屋根のない博物館とする取り組み、「松本まるごと博物館(通称：まる博)」の構想が策定された。現在も、「まる博」構想をもとに様々な取り組みがなされている。

3. 馬場家文書の調査

(1) 馬場家文書調査の経緯

馬場家には、江戸時代前期以来の貴重な古文書が多く伝来しており、建造物と古文書と一緒に伝来している点で価値が高い。しかし、建造物と敷地の多くは、松本市へ寄贈、重要文化財指定、市民へ公開されているのに対し、古文書は松本市に寄贈されず、公開にはいたっていない。本稿では、馬場家が所蔵している古文書を「馬場家文書」と称する。

馬場家文書調査の経緯については、石川・服部(2017)で既にまとめた

め、ここでは概略に留める。最初に1953年に東筑摩郡郷土資料編纂会により目録が作成された。この目録作成時に確認された文書は、『古文書目録』第9集に「馬場称徳氏所蔵文書」として856番まで掲載されている。ただし、数点を一括して数えられたものもあった。次に、1992年から松本市史編纂室によって調査がなされた。しかしながら、この段階でも未調査の文書が多く残っており、文書群の全体像は不明のままであった。そのため、文書資料に基づいた本格的な調査がなされず、伝承が一人歩きしている状況が続いている。また、文書の保存環境も改善が必要な状況であった。

このような状況の中、馬場家当主からの相談を受け、かねてより馬場家の宗門人別改帳の調査に訪れていた名古屋大学の溝口常俊教授（現、同大学名誉教授）が中心となり、2012年10月に名古屋大学重要文化財馬場家住宅研究センター（以下、馬場家センター）を設立した。馬場家センターでは、歴史的建造物部門、歴史地理研究部門、日本文化研究部門、民俗文化研究部門といった複数分野の教員により、馬場家を軸に総合的な地域研究が進められた。2013年3月に松本市教育委員会との間で、文化・学術活動及び地域貢献に係る連携に関する覚書が締結された。締結後、松本・中信地域の遺産に着目した研究が進められ、松本市教育委員会との研究交流会、市民向けの公開講座やワークショップ、パネル展示が毎年開催された。馬場家センターの活動や研究成果は、2012年から2016年度に発行された『名古屋大学重要文化財馬場家住宅研究センター報告』に詳しい。なお、2017年3月には当初予定の設置期限を迎えたため、馬場家センターは解散した。

(2) 馬場家文書の整理・調査活動

馬場家センターの歴史地理研究部門と日本文化研究部門では、馬場家文書の悉皆調査を進めると同時に、馬場家文書の整理を進めてきた。筆者は、馬場家センター設立以前から、馬場家文書の調査に関わっていたこともあり、2014年11月から招へい教員として馬場家センター歴史地理研究部門の活動に加わった。2015年10月に愛知県立大学日本文化学部歴史文化学科へ着任後、学部生や院生にこの文書整理・調査活動への参加を呼びかけたところ、延べ31

人の学生が参加した。一人で10回以上参加した学生もあり、複数回参加している学生も多い。馬場家センター解散後は、愛知県立大学の教員研究費、学長特別教員研究費を利用し、この活動を続けてきた。本節では、名古屋大学の石川寛准教授と愛知県立大学の学生と共に進めてきた、馬場家文書の整理・調査内容についてまとめる。

馬場家センターが古文書の調査に入った2014年時点、馬場家文書は「松本市」の文書箱13箱、化粧箱7箱、蓋のない箱1箱に収納されていた(石川・服部2017)。「松本市」と書かれた文書箱は、松本市史編纂室によるものである。そのうち箱1～8には、東筑摩郡郷土資料編纂会『古文書目録』に掲載された文書が、箱8～13には、目録未掲載文書が収納されていた(箱8には両者が混在していた)。化粧箱には、「寛政天保殿様巡見」等と紙が貼られており、現当主によって目録未掲載文書が内容別に収納されていた。

これらの文書について、まずは文書の保存のため、通番を付けて中性紙の封筒に収納し、さらにその封筒を、アーカイバルボードを使用した保存箱に詰め替えた。全部で28箱に収納した。ほかに地券、絵図類、典籍・図書類、明治以降の日記や辞令・褒状、他家文書と思われるものも存在した。

次に、封筒に詰めた文書について1点ずつ詳細な目録を採った。東筑摩郡郷土資料編纂会による目録は、標題と作成年が採取されているにすぎないため、目録掲載分文書はこれらの情報の確認に加え、作成者、宛名、形態、一括情報、その他備考として表紙に記された情報等も採取した。

多くの人数で、現地での詳細な目録採取をできれば良いが、人手、時間や費用がかかるため難しい。また、作業場所の気候環境から、冬期は実施できない。他方で、文書を一括借用した上で目録採取することも、紛失等の恐れから避けるべきである。したがって、効率的な目録採取のため、また、将来的に馬場家文書を個人所蔵のまま、所蔵者の許可のもと文書館等で閲覧可能な体制を目指すために、全文書の写真撮影を試みた。この写真撮影を主に学生が担当した(図5)。

写真撮影の前に、古文書の扱い方や注意点について筆者が指導し、撮影の仕方については、撮影経験のある学生が伝えた。挟込文書、結び紙がある場合に

は、状態が判別できるように撮影し、各文書についても撮影した。また、付箋がある場合は、付箋の下の文字も読めるように付箋をめくった状態も撮影した。

撮影された写真をもとに石川氏が研究協力者と共に目録を採り、その目録情報をもとに、筆者が現地で原本を確認しながら、封筒に目録情報を記載し



図5 馬場家文書撮影風景
(2018年6月2日筆者撮影)

た。原本確認の際に判明した修正箇所は、目録に反映させた。以上の方法によって、最初に保存箱28箱へ収納した馬場家文書は、枝番を含め全部で4464点となった。

これまでの文書調査により、馬場家文書は、家の古文書のみならず、村の古文書も充実していることがわかっており、地域の歴史を知る上でも大変貴重な資料群と言える。なかでも宗門人別改帳は、1673（寛文13）年から1868（慶応4）年にわたる約130冊が保存されており、全国的にも珍しい⁵⁾。馬場家所蔵の宗門人別改帳は、横帳の形態をとり、必要な情報（出生者、死者、年季者など）がまとめられ、付箋を貼って変更を示すなど、村の控えとして作成されたものと考えられる。

(3) 教育的効果

本節では、馬場家文書の整理・調査活動を続けることによって、いかなる教育的効果が見られたか、主に2つの観点からまとめる。

歴史文化学科では、例年1学年（約50名）につき20名程度が、博物館に関する科目を履修し、学芸員資格を取得している。学芸員資格取得を目指す学生は、博物館に関する科目を履修する中で、古文書の扱い方や整理の仕方を一通り学び、最終年度に学外の博物館で博物館実習をおこなう。また、学芸員資格とは別に、専門科目のうち「歴史文化資料学（歴史）」や「古代・中世文書演習」、「近世文書演習」では、一次史料の読解力をつける演習が組まれている⁶⁾。

これら専門科目の受講生の中には、教員の学外における資料整理に参加することもある。

したがって、博物館に関する科目を履修する学生や、学外での資料整理に参加する学生は「生の古文書」を扱う機会があるものの、歴史文化学科の学生であってもそのような機会は少ない。馬場家文書の整理・調査活動によって、学芸員資格とは関わらず、学生に「生の古文書」を扱う機会を広く提供できたと考えられる。参加した学生の中には、馬場家文書の翻刻を試みる学生や、卒業研究で古文書を自ら発掘し、解読に挑む学生も出てきた。

次に、地域資源とは何かをフィールドで考えることが可能となった。本学科では公務員（一般行政職）への就職を志望する学生が、毎年一定数存在する。配属部署によっては、まちづくりや、文化財の保存・活用に携わることもある。近年、文化庁が2016年4月に「文化財活用・理解促進戦略プログラム2020」を策定し、2018年10月に組織再編にともない、文化資源活用課を新設した。上記プログラムでは、文化財を「観光振興に欠かせない貴重な資源」として見なしている⁷⁾。しかし、文化財を単なる観光資源にとらえ、経済効果を追求するあまり、安易な観光政策に着手するのではなく、基礎的調査を積み重ねること、保存し後世へ継承すること、地域の個性（地域性）を見極めた上で活用することが必要であろう。本学科学生の就職志望の傾向や、社会の状況を鑑みると、学芸員資格を有しなくとも、このような人材を育成することも本学科に求められていると考えられる。実際に、学芸員資格を取得していないものの、馬場家文書の整理・調査の経験を活かした職に就いた学生もいる。

4. 新入生歓迎旅行における見学会

(1) 見学会の概要

歴史文化学科では、毎年5月に新入生歓迎旅行として1泊2日で教員主催の研修旅行を実施している。2019年は筆者の計画により、バス2台（学生・教員・卒業生計75名）で長野県西南部を訪れた。2日目の午前には、重要文化財馬場家住宅に向かった。快晴のなか松本市立博物館分館長・学芸員の解説のもと2班に分かれ、屋敷内外を約1時間かけて見学した。馬場家のご好意によ

り、通常は非公開の隠居屋と茶室（図2）も見学し、隠居屋にて宗門人別改帳の閲覧も実現できた。参加者は、見学後に「県大・歴史が選ぶ馬場家住宅の魅力」への投票と感想を記入した。この見学会と投票は、馬場家センターが2016年9月に実施した公開講座（馬場家住宅魅力発見ツアー）の手法⁸⁾を参考にした。

(2) 参加者の声

参加者が馬場家住宅の中で最も気に入った場所として多く挙げた場所は、「祝殿と大ケヤキ」（25票）であった（図6）。次に、「主屋内」（11票）であり、具体的な場所としては、コザシキ（5票）、ザシキ（3票）、ネマ（2票）、ロウカ、イリカワ、オエ（各1票）が挙げられた（複数回答、無回答あり）。続けて「主屋（外観）」（9票）、「隠居屋」（5票）、「茶室」（5票）、「表門」（4票）、「坪庭」（4票）、「文庫蔵」（1票）となり、その他としては、欄間の彫刻、周辺の景観、近世文書類が具体的に示された。投票は1人1票のみ、項目も2016年の公開講座と異なっているため、単純に比較することはできないが、主屋内・外よりも「祝殿と大ケヤキ」の投票数が多かったことは意外であった⁹⁾。

参加者は、祝殿と大ケヤキの場で「馬場家住宅は景観も含めての文化財」と説明を受けた。この言葉と目の前に広がる景観が、参加者の印象に残ったようである。参加者による感想の一例を次に示す。「今まで、建造物があると、建物にばかり注目してしまいがちでしたが、馬場家住宅は、景観も文化財と聞いて、周りの環境がとても大事だと改めて気づかされました」、「建物はもちろんとてもきれいに残っているが、その周りの景観も美しく残っていて、『景観も含めての文化財』はこういうものなんだと思った」、「建物だけでな



図6 祝殿と大ケヤキ
(2017年11月2日筆者撮影)

く、その周辺の環境も守っていかなければならないという言葉が印象に残りました」などと、景観と建物の両者が残っている点の重要性を実感し、その保存について考えるきっかけになったと言える。

また、宗門人別改帳の閲覧機会に対する感想も見受けられた。たとえば、「宗門人別改帳は高校時代日本史の資料集などで写真を見たことは多々あったが、やはり実物を見ると写真では感じられない生感が感じられてよかった」、「すごく貴重な資料を見せてもらえて感動した。元禄以前の資料があるなんて実感わかなかつたし、本当にそんな昔の資料が本当に存在するんだって思いました」などと、これまで歴史の資料として写真で見たり、博物館などの展示資料としてガラス越しに見ていたものを、実際に目で見て、触ることができたりしたことになんか感動を覚えたようである。

5. おわりに

本稿では、愛知県立大学の学生と共に実施してきた馬場家文書整理・調査活動、重要文化財馬場家住宅の見学会についてまとめた。

馬場家文書は、これまで悉皆調査がなされておらず、全体が把握されていなかった。また、馬場家現当主の記憶にはあるものの、所在不明の文書（12代当主の道中日記等）もあった。馬場家センター時、センター解散後の馬場家文書整理・調査活動を通じて、全4464点の仮目録を採取することができた。現当主が探していた文書も見つかり、12代当主の馬場治左衛門夫婦による明治6年の旅を復原した¹⁰⁾。この研究成果をもとに、2019年9月14日～10月27日に令和元年度重要文化財馬場家住宅企画展「明治初めの旅事情～道中日記録を手がかりに～」が開催された。

しかしながら、まだ馬場家文書の全体像解明にはいたっておらず、典籍・図書類や近代の日記等は整理が終わっていない。次年度も引き続き、学生と共に残りの文書整理を進め、個々の馬場家文書を読み解き、馬場家を中心とした地域史研究を進めていく。また、石川氏と共に馬場家文書の全体像を解明し、馬場家文書目録を完成することを今後の課題とし、馬場家文書を公開できるように整備していきたい。

謝辞

本稿は、平成30年度愛知県立大学学長特別教員研究費「馬場家所蔵文書の研究資源化」の研究成果の一部である。

注

- 1) 石川寛 (2016) 馬場家文書と馬場家, 名古屋大学重要文化財馬場家住宅研究センター『平成27年度研究交流会～馬場家文書が語る歴史～研究報告・意見交換会記録』: 1-12.
- 2) 「馬場屋敷の保存正念場」(信濃毎日新聞1988年10月23日)
- 3) 「松本の馬場家が国重文に」(市民タイムス1996年10月19日)
- 4) 後に3館が追加され、現在は16の博物館が核となっている。
- 5) 溝口常俊は、馬場家の宗門人別改帳から、北内田村の家族構成やその変化を明らかにしている。溝口常俊 (2017) 「文久4年(1864)宗門改帳」にみる北内田村の家族構成, 『名古屋大学重要文化財馬場家住宅研究センター報告2016』: 137-140.
- 6) 演習では、複写した史料を解説する。そのため、演習受講生は、どのように古文書を撮影すれば読みやすいか理解している。
- 7) 「文化財活用・理解戦略プログラム2020の策定について」(文化庁2016年4月26日報道発表資料)
- 8) 名古屋大学重要文化財馬場家住宅研究センター (2016) 『平成28年度公開講座 馬場家文書と馬場家住宅が語る文化と歴史—遺産の魅力—講演・見学会・発表講演会記録』
- 9) 2016年の公開講座では、1人3票を投じる方法であり、93票のうち「表門と全景」が16票で1位、「祝殿と大ケヤキ」は2票のみであった。
- 10) 服部亜由未 (2016) 馬場家文書「道中日記録」, 『名古屋大学重要文化財馬場家住宅研究センター報告2015』: 179-221.

参考文献

- 石川寛・服部亜由未 (2017) 解題：馬場家文書 (その1), 『名古屋大学重要文化財馬場家住宅研究センター報告2016』: 165-166.
- 丹羽昌一 (1998) 『天皇の密使』文藝春秋.
- 松本市教育委員会文化課編 (2012) 『松本市重要文化財馬場家住宅第1期修理工事報告書』松本市立博物館.